

で特集)のもこの頃でしたね。

それらに対し、私が今知る限りでは、児童文学の側から二つの応答がありました。一つは評論同人誌「季刊児童文学批評」(八一年)の創刊であり、もう一つが児童文学の総合誌『飛ぶ教室』(光村図書 八一年)の創刊です。あなたは後者に創刊号から関わられました。(エッセイ「日本のプー横町——私的な、あまりにも私的な児童文学史」の連載)ました。けれどもこうしたことは後年になって知ったこと、当時の私は、もっと別のことで悩んでいました。

3 『兎の眼』または理想の教師像の呪縛

七八年に教育学部に入學した私を待っていたのは灰谷健次郎の『兎の眼』(理論社 七四年)でした。級友たちが小谷先生のようになりたいたいと異口同音に語るのです。私は、結婚生活を捨てなければ良い教師にはなれないのかと正直思いました。『太陽の子』(理論社 七八年)にも、シルクロードへの夢を捨てて「本気で」教師になる梶山先生が出てきます。私には苦しかった。追い討ちをかけたのが、七九年一〇月から始まったテレビドラマ『3年B組金八先生』でした。二四時間生徒を想い、生徒と格闘する金八先生に驚嘆しつつ、自分にはこんなスティックな生活はとてもしかないと思いました。そんな時、偶然にあなたの『目こぼし歌こぼし』と出会ったのです。

この作品には、いろいろなメロデーが重なりあうオーケストラの響きがありました。どの音に耳を澄ますのも自由でした。それは私に読む楽しさを思い出させました。私は少し、「理想」から解放されました。

4 三の庄のからくり

でも、当時を回想するのはここまで。それより私は、今改めて『目こぼし歌こぼし』と向きあっています。なぜならこの作品はあなたの処女評論集『戦後児童文学論』(理論社 六七年)のほぼ完全な物語化であり、あなたの文学の起点と言えるからです。大澤真幸が『不可能性の時代』(岩波書店 〇八年)の中で、映画監督小林正樹の敗戦直後の感慨を「日本社会が、あまりの短期間に大きく変化することができたのは、実際には、何も変わっていないからではないか」(二六頁)とまとめていますが、この「日本社会」を「日本児童文学」に置き換えたものが、『戦後児童文学論』に一貫しているあなたの問題意識でした。本当の意味でこの国の児童文学が変わるためには何が必要なのかを、あなたは渾身の力を込めて論じています。『目こぼし歌こぼし』からはその思索の跡がよく辿れます。

さて、この作品は『ちょんまげ手まり歌』(理論社 六八年)に続くいわゆるまげ物です。御城下に住む若い侍七十郎が、とある殺人事件に遭遇するばかりか、今度は父親が